



日本防災士会広島県支部会報



第15号 平成21年5月2日

日本防災士会広島県支部活動報告

【広島県被災者生活サポートボランティアセミナー報告】

3月16日広島県社会福祉会館において、広島県被災者生活サポートボランティアセミナー～協働による被災者支援を考える～が広島県社会福祉協議会主催で開催され、桑木副支部長がパネリストとして参加しましたので報告します。

<http://www.hiroshima-fukushi.net/>

災害時に被災者の生活を守るための取り組みの必要性は理解されながらも、現実には体制が確立されていないのが実情です。

広島県では現在県内3市町が「災害時に被災者の生活を守る」体制作りに取り組んでおり、これからの進展が期待されています。

今回先進の長野県松本市の実情についての基調講演の後、「広島発！被災者支援に備えたつながりづくりを考える」のパネリストとして参加し、ボランティアの立場から被災者生活サポートボランティアの取り組みとして、三原市の事例を桑木光信防災士から説明しました。

広島県社会福祉協議会のHPに掲載されている、広島県被災者生活サポートボランティアのページには「災害時のボランティアの支援」の位置づけについて理解しやすい図を設けて詳しく解説されています。

また、「広島県被災者生活サポートボランティア推進マニュアル～関係機関協働編～」の項は私たちの活動の参考になりますので、是非読んでみてください。

<http://www.hiroshima-fukushi.net/04volunteer/05volnet.html>

【参考資料】

砂防広報センターのネットワークニュースに安佐南区自主防災会連合会 原田照美 会長の記事が掲載されていました。今後の活動の参考にしてください。

砂防広報センターHP <http://www.sabopc.or.jp/>

【今後の予定】

- 5月13日(水) 第5回広島県支部勉強会
9時30分～12時 「広島県砂防ボランティア」講話 広島地方気象台現業室見学 他
場所：広島合同庁舎第4号館13階第9号共用会議室
- 5月15日(金) 第6回広島県支部勉強会 「NTT西日本の防災対策」
18時30分～21時 講師：NTT西日本広島支店災害対策室長 木本富男防災士
場所：幟会館2F
- 5月27日(水) 第7回広島県支部勉強会
11～12時 砂防学会特別講演 場所：アステールプラザ
- 6月1日(水) 第1回 広島県防災フォーラム (第8回広島県支部勉強会)
13:30～16:00 場所：しまなみ交流館(テアトロシェルネ) JR尾道駅南口からすぐ
内容：広島大学土田孝教授講演・パネリストディスカッション、土石流発生モデルのデモコーナー
- 6月5日(土) 「広島県土砂災害防止月間県民の集い」(第9回広島県支部勉強会)
13:00～16:30 内容：広島大学土田孝教授講演・パネリストディスカッション、土石流発生モデルのデモコーナー
場所：広島市西区民文化センター
- 6月2～5日 広島市西区民文化センター キャラリー 日本防災士会広島県支部パネル展示
- 8月30日(日) 広島県防災訓練(福山市開催予定)

防災リーダーインタビュー

災害に強い地域づくりをめざして 防災の「新たな公」の動き

— 広島市安佐南区自主防災会連合会 —

平成11年、広島市で豪雨により20名が犠牲になった「6・29災害」、広島市安佐南区伴地区ではこの災害を契機に自然災害への危機意識が高まり、独自の防災活動を展開しています。

伴地区を営む安佐南区自治防災会連合会会長の原田照美さんに地区を案内していただき、お話をうかがいました（平成20年10月15日取材）。

広島訪問の経緯

「災害時の新しい協定を結んだから」、平成15年度土砂災害防止推進の集い全国大会でパネラー出演された原田照美さんからの電話でした。

原田さんの住む広島市安佐南区伴地区では平成7年、3小学校区の自主防災会が集まって、自主防災会連合会を結成しました。原田さんはその際、中心となって活躍し、現在は伴地区を含む安佐南区自主防災会連合会の会長さんです。



安佐南区自主防災会連合会会長・原田照美さん

安佐南区

を出した豪雨災害（6・29災害）で、伴地区では新興住宅地の瀬戸内ハイツの一角が土石流に襲われ、不幸にして2名の方が亡くられました。この災害を契機に危機管理の意識が高まり、防災マップづくりや独自の防災訓練などを続けています。

広島駅から車で約15分、「西風トンネル」を抜けると山陽自動車道の先に新しい高層ビル群がそびえ、高台に無数の戸建て住宅が整然と並び、ベッドタウンの風景が目に見えます。安佐南区は新しい道路に車が行き交い、驚くばかりの活気。ハイツと名の付く高台や分譲地の数々、広島自動車道インターの近くには工業団地、交通網も整備され、中心市街へのアクセスに優れた伴地区



アストラムライン（基架の電車）をくぐった先、高台に住宅の密集する団地が見える

土砂災害環境

はここ5年で人口が2割増加し、近い将来10万人の住む町になるそうです。

災害時の避難所にもなっている伴小学校は山裾の少し高い場所にありますが、地図を見ると土石流危険渓流の出口近くに位置しています。現在は上流に遊砂地機能を持つグラウンドが整備されていますが、学校が置かれた環境は、伴地区が土砂災害に対していかに厳しい条件にあるかを象徴しているように思えました。

平成11年に瀬戸内ハイツを襲った土石流の発生した谷は、砂防えん堤と砂溜工が整備され、上流を見通したところ既に木々が生い茂り、どこが沢なのかも



瀬戸内ハイツ上流の砂防えん堤と砂溜工



伴小中学校付近の防災マップ



砂防施設が整備された現在の瀬戸内ハイウェイ (Google Mapより)



(左) 瀬戸内ハイウェイと被災地
(右) 平成11年8月、25日撮影時

住宅はどこも山裾まで迫り、あるいは高台の上に広がって、がけ崩れの危険箇所も多くあります。しかし、風のさわやかなベッドタウンとして発展中の街は、さらに多くの人口を受け入れようとしています。

新しい協定

新しい人たちがどんどん入ってくるこんな広いエリアで、どうやって防災を？ この疑問の答えが原田さんのおっしゃる「新しい協定」を含む一連の動きだったのです。

平成20年6月、安佐南区自主防災会連合会はJA広島市・広島県飲食業生活衛生同業組合安佐南支部と「災害時連携・支援協定書」を交わしました。これは大規模な災害が発生したとき、企業側が自身の負担で得意分野の支援を行うものです。JAは飲料水やプロパンガスの提供な



安佐南区自主防災会連合会が企業や団体(下記)と結んだ「災害時連携・支援協定書」
(広島市農業協同組合・広島県飲食業生活衛生同業組合安佐南支部・生活協同組合ひろしま・第一タクシー株式会社)

どを行い、飲食業組合支部は店舗トイレの開放・避難所での調理支援などを行います。また、9月には生活協同組合ひろしまのほか、第一タクシー株式会社とも「災害時連携・支援協定」を結び、災害時要援護者の搬送・救援物資の輸送の支援が会社負担で行われ

ることになりました。災害時要援護者については、7月に安佐南区役所・安佐南区自主防災会連合会・安佐南区社会福祉協議会・安佐南区民政委員児童委員協議会の4者で避難支援事業に関する覚え書きを交わし、協力し合うことになっています。

新たな公

この話を聞いて「新たな公」という言葉が思い浮かびました。自分たちのことは行政に頼らず、住民や企業などが手をとりあつてダイレクトに問題に対応、行政は必要に応じてそれを支援するというしくみのことです。原田さん達は土砂災害を最小限に食い止めるといふ課題に対して税金をあてにしない方法を独自に推進してきたのです。伴地区では以前から防災訓練に地域の建設会社や開業医のみなさんがボランティアで参

加していました。「社会貢献がPRになるから」という理由でした。

地域の自主防災会の育成・指導を担当しているのが広島市安佐南区役所・安佐南消防署。この日、安佐南消防署を訪問することになり、署長の山下さんと副署長の奥迫さんにお目にかかることができました。

山下署長は、「人を動かすのは原田さんの情熱です。土砂災害の現場を自身で経験し、二度と犠牲者を出さないようにしたいという気持ちから出発しているのが、地に足がついている。説得力が違います」とおっしゃいます。さらに、「日本人は捨てたものではないです。福知山線の脱線事故の時、現場近くの会社が何社も業務をやめてボランティアにかけた。日頃お世話になっているから当然のこと、と考えるトップが増えていきます」と。

小さな目配りからの大きな防災

今や防災の講師として引っぱりだ

この原田さん、特に自治体職員の方々の勉強会に呼ばれることが増えているようです。「新しい住宅街を大きな岩が流れていく、現実になんかことがあるのですよ」と具体的な体験談をする。聞く人の真剣さが変わるそうです。そして、「あなたの町の役場のエレベーターには地震の時の注意が貼ってありますか?」これは気になるようなのだそうです。

防災は肩肘張ったことではなく、身の丈サイズの目配りの積み重ね。運動会やお祭りでも人が顔合わせするのも大事。人がつながっていると防災訓練も楽しくなり、万一の時には被害を小さくできる。原田さんの考えもやっぱり、「防災は地域づくり・人づくり」。大きな街の防災も小さな町の防災も基本は同じなのだと思後に納得できた広島訪問でした。

安佐南区防災訓練・防災フェアの様子 (平成20年9月11日)

(上) 炊飯器、プロパンガスはJA広島市の提供
(下) 要援護者及び支援者の自主避難



福荷川



写真上)文化庁の登録文化財にも指定されている福荷川沿いの砂防えん堤群での草刈り作業
写真下)「日光ツアーフォーク」参加者の多くが福荷川第2砂防えん堤をバックに記念撮影

と及節点をいただき「安心でした。」

イベント当日は、コースの折り返し地点で休憩ポイントとなる福荷川第2砂防えん堤付近に身を置き、小林会長らが作成した「福荷川歌集マップ」を配りながら、参加者に砂防や土砂災害の解説を行うアテンドのお手伝い。砂防えん堤前での記念撮影を促すことなどをきつかけにして、参加者とコミュニケーションをとりました。その結果、砂防の現場を思いがけず訪れることとなった多くの方からの、率直な感想や希望などを聞くことができました。

〔広島市〕自主防災組織の取材(第11号掲載)

キーパーソン/安佐南区自主防災会連合会会長・原田剛美さん

始まりは本誌編集部員にかかってきた1本の電話でした。広島で安全・安心を目指す人のネットワークによる独自の防災活動を進めてこられた原田さんから「災害時の新しい協定を結んだ」との連絡を受け、自主取材に駆けつけました。

原田さんは、平成11年に広島市を

中心に豪雨で大きな被害を出した、いわゆる「6・23災害」を経験する前から、安佐南区伴地区の自主防災会を連合会として組織、災害後は病院や建設会社ほか地域のボランティア団体なども連携して、泊りがけの大規模な防災訓練などを展開していました。そこに、この「新しい協定」という興味深い話題が飛び込んできたのです。

これは、「災害時連携・支援協定書」として自主防災会連合会と地元(の団体や企業)「J/A、飲食業・生活衛生同業組合、生活共同組合、タクシー会社」とのあいだで交わされたもの。大規模な災害が発生したとき、その団体や企業が自身の負担で得意分野の支援を行うことが明示されています。

広島市の北部に位置する安佐南区は、ベッドタウンとして山崩れまで宅地が広がり、人口が今も増え続けています。新しい人たちがどんどん入ってくるこのエリアで、まさに「新たな公」とも呼べる試みが誕生しました。

原田さんの情熱が動かし、地域

砂防広報センター自主企画映像第2作 立体ハイビジョン「がけ崩れを知ろう!」完成

砂防広報センターでは自主企画映像プロジェクトの2作目として、意識啓発映像「がけ崩れを知ろう!」を制作しました。

1作目の、広島県広島市住民のみなさんが地域ぐるみの避難を語るメッセージ映像「避難して良かった」に続いて昨年末に完成したもので、1月からDVDでの配布を始めました。

2作目は、がけ崩れのメカニズムや前兆現象を知ることが身のまわりの危険箇所への注意と早めの避難につながるものと考えて制作しました。土砂災害防止法の説明にも有力な教材と自負しております。1作目と併せてご活用ください。

特に今回は観覧を立体ハイビジョン仕様で制作しました。土砂災害は体験すると一命に関わる現象であるため、シミュレーションによる疑似体験は災害の恐ろしさや自然のしくみを知るためにたいへん有力な手法です。3Dシアターでも是非一度ご鑑賞ください。

■お問合せは砂防広報センター
TEL.03-3239-1711 担当:伊藤
<http://www.sabopc.or.jp> へどうぞ



の防災のための連携。ここでも基本は「地域づくり・人づくりの延長に防災がある」という姿でした。

◎まとめ

これらの活動に共通するのは、一言で言えば、地域を思う強い気持ちで地域を動かす原動力である、ということ。多少のきっかけはあるにせよ、誰に言われたわけでもなく、また誰に頼るのでもなく、自分たち

の熱い思いが人の輪をつくり、地域防災を盛り立てる力につながっています。これがこそが砂防ボランティア精神なのだ、あらためて学ばせていただきました。

私たち砂防広報センターも、数しながらも砂防ボランティア精神の持ち主たちと連携し、情報を発信し、これからも各地の「災害に負けない地域づくり」に少しでも貢献していくことができればと考えています。

広島市



写真上)広島市安佐南区自主防災会連合会が企業や団体と結んだ災害時連携・支援協定書
写真下)安佐南区防災訓練で行われた避難訓練および支援者の自主避難

編集室から

『砂防資料館ネットワーク』2013年6月号のご挨拶

平成19年4月に創刊した本誌は、隔月刊を基本として12月号を数えたところですが、読者の事情から今号をもって終刊いたします。

本誌ではこれまで、公益活動の一環として、有識者との連携や全国各地の先進的な防災活動などへの取材を通じ、砂防や防災に関する有益な情報提供を志してきました。また、事業の告知を行うことにより、自ら評議を構むための場としても活用してきました。

紙媒体、無料配布、そして「砂防広報センターらしさ」の表現にこだわってきたことで、私たちのビジョンの表明はそれなりに果たせてきたと自負しています。同時に、そのことによって育まれてきた読者の熱意も、誌面より多少は伝わってきたのではないかと、これまでを振り返り改めて感じている次第です。

今後、本誌で働きあげてきた姿勢は、月刊誌「メディア砂防」の編集に引き継ぎ、より充実した誌面づくりに向け努めてまいります。

読後にはなりますが、本誌をご愛読くださった皆様、誌面に登場いただいた皆様、誌面制作にご協力いただいた皆様、2年という短い期間でしたが、誠にありがとうございました。

NPO法人砂防広報センター
専務理事 反町健二